キューピー　4／4

第１４３回
野木村政三

♪　ドンと波　ドンと来て　ドンと帰る
　　チャップ波　チャップ来て　チャップ帰る

ドン　チャップ　ドン　チャップ　キューピーちゃん
　　ピーちゃん　お国は　海の向こう
　　来るとき　お船に乗って来た

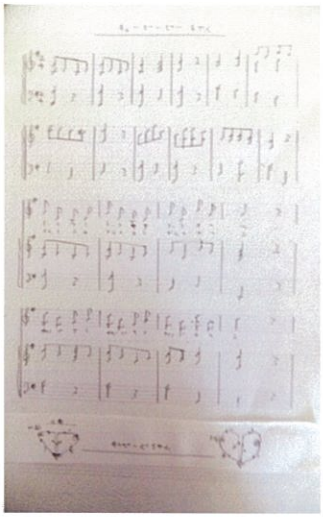
ドンと波　ドンと来て　ドンと帰る
　　ドン　チャップ　ドン　チャップ　キューピーちゃん

「コドモノクニ」という雑誌の 1930（昭和 5）年 10 月号に、野口雨情がキューピー・ピーちゃんの詩を発表しました。

この詩に中山晋平が曲をつけました。広く歌われて昭和 10 年頃には、キューピー・ピーチャン踊りが流行しました。

セルロイドハウス横浜館では野口雨情のレコードを展示して試聴できるようになっています。昔のレコード盤の素材には、コロジオンが使われていました。

キューピー・ピーチャンの歌と踊りを、東京の高等女学校（ミッションスクール）で生徒に教えていらした女教師の方の遺稿もあります。



野口雨情は 1919（大正 8）年、38 歳のとき「枯れすすき」を発表しました。中山晋平が曲を作り『船頭小唄』と改め、後世に残る大ヒットになりました。

それからの雨情は

1920（大正 9）年 39 歳、シャボン玉、十五夜お月さん、アンデルセン

1921（大正 10）年 40 歳、**青い目の人形**、赤い靴、七つの子

1922（大正 11）年 41 歳から童謡紙「コドモノクニ」に自作を載せることにしました。

証城寺の狸囃子、兎のダンス、あの町この町、波浮の港紅谷の娘、俵はごろごろ、上州小唄、県立中学校校歌・・・等々、2,000 以上の童謡を作りました。

1930（昭和 5）年 3 月、雨情 49 歳、新潮社発行の現代詩人全集の第 11 巻に自伝の文章も書かされたのですが、書いたのは僅か 9 行でした。雨情という童謡詩人の実直な人柄が偲ばれます。キューピー・ピーちゃんを作ったのも、この年でした。

大正から昭和にかけて日本は、セルロイド玩具の黄金時代でした。特に昭和 5 年から 10 年までの期間はセルロイド製品の輸出が最高額を達成しました。日本製のキューピー人形は人気商品で輸出に大きく貢献しました。

以上のことを知る人にとっては、雨情のキューピー・ピーちゃんの作詩時期が昭和 5 年ということなので年代的な違和感を生じるのではないでしょうか。

しかし、ドイツで作ったローズ・オニールのキューピーが、既に 1917（大正 6）年に日本に輸入されデパートで販売されていたのです。「青い目の人形は」はキューピーです、と雨情の次女・香穂子（大正 7 年生まれ当時 2 歳）が真実を読売新聞（唱歌・童謡物語 1999 年、岩波書店刊）に詳しく述べています。

「雨情」という映画がありました。昭和 32 年に封切りになった白黒映画です。雨情が結婚後も、幼い息子を連れて初恋の芸者を追っかけ廻るストーリーで酷い映画でした。

雨情の役は、満州から帰国直後のコメディアン・森繁久弥です。

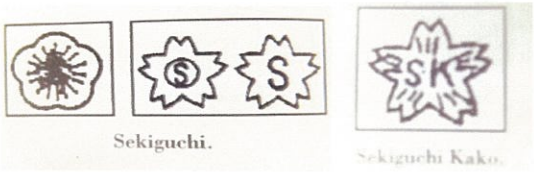
スクリーン一杯に

♪　青い目をしたお人形は
　　アメリカ生まれのセルロイド

の文字が映しだされ、音羽ゆりかご少女合唱団がその文

字に合わせて唄います。そこで広告にキューピーの絵があったのでキューピーが登場するだろうと思っていました。でも写真の男女セルロイド人形のうちの赤着の女児だけが映写されました。何故キューピー人形を手配出来なかったのだろう、映画撮影所小道具係の感覚が鈍いからだろう、と思いました。

写真の人形の 2 体は、セルロイドハウス横浜館に展示してあるセルロイド製品です。男女とも、ｈ２４㌢で、女児の中に笛が入っていて動かすと笛がなります。２体とも、背中にセルロイド人形の加工大手「セキグチ」のトレードマークが刻印してあります。



＊＊＊

右写真は、横浜館３Ｆに展示してある、ビニールのキューピーです。ｈ60 ㎝、幅 41 ㎝です。キューピーの背中に、メーカー「セキグチ」のトレードマークがありますが、マークの大きさが 0、８㌢なので小さすぎてこの写真では良く見えません。セキグチさんのビニール製のキューピー第１号です。

セキグチさんの経歴書の年表では、

1951（昭和 26）年、この頃より可燃性セルロイドの評判が悪化し、各国各社、難燃性不燃性素材の追及につとめる。種々新製品開発なるも色彩不可、または接着性が悪いなど一長一短。

1953（昭和 28）年、初めてソフトビニール技術指導を受ける。

1954（昭和 29）年、ソフトビニールの技術完成、製品化に成功。

キューピー、こけし人形・・・・・・・とあります

＊＊＊

塩化ビニール系ソフトビニール玩具が初めて日本に上陸したのは、ある人がアメリカから持ち帰ったカール人形であると言われています。

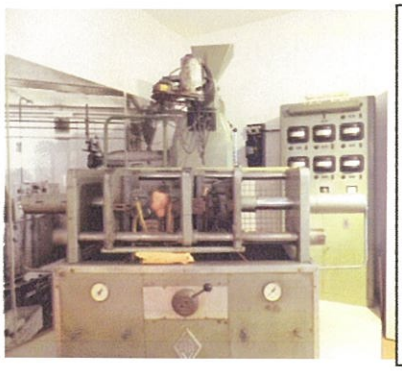
カール人形の触感や柔らか味、適度の重量感、それに色艶が従来のセルロイド人形よりはるかに優れていたので、新興の人形として一躍ブームを現出しました。

当時は、セルロイド玩具が可燃性によってアメリカからボイコットされ、日本国内でもデパートから販売しないと宣言を受けて、セルロ

イド玩具業者は暗黒時代を迎えていました。
この時ソフトビニール人形が出現したことは、まさに業界にとって干天の慈雨でした。

昭和29年頃から、セルロイド加工業者の多くが競ってソフトビニール加工に転換するようになりました。が、日本には未だソフトビニールの原料である塩化ビニールのペーストが量産されていませんでした。もっぱら輸入に依存していたため、加工業者の必要量を充分に供給出来ませんでした。
またソフトビニール人形の加工方法も未だ研究過程で技術が幼稚であったため、セルロイド加工のように旨く行かず現在のような良い人形は出来ませんでした。

ソフトビニール玩具の型は、最初はセルロイドと同じ割り型でした。この型にゾルを注いで成型しましたが、この方法では肉厚が不動になったり、また、充分に焼けなかったり、焼けが不同になったりして不良品が多く出ました。


ドイツのビニール成型機

昭和30年頃、ある人がアメリカの成型方法をみてきて業者に説明したのが、ローテーション加工でした。しかし、話を聞いただけでそのローテーションがうまくできる筈がなく、機械屋は何回も失敗しました。
遂にドイツから機械を輸入しました。その現物を見て、機械屋が日本の加工業者用に改造しました。このローテーションは大型のものは一方の型にゾルを注入すると一方の出口から製品が続々と出て来るという、極めて生産能率の高いものでした。

だんだん研究しているうちに、アメリカから電気メッキで作った型が入ってきました。この製法は、原型を電気槽に浸して原型の周囲に電気で金属を付着せしめるという、極めて簡単のものです。原型が1固あれば、これを使用して何型（何回）でも繰り返しして、しかも短時間に安価に人形が出来ますので、セルロイドの彫刻型に比べて実に画期的な製法でした。（現在は金型・スラッシュ工法＝カミジョウ、加工＝オビツ製作所）

1960（昭和35）年頃にはソフビ生産が飛躍的に向上し、原料の品質も研究されて良くなり、加工も慣れるに従って能率が上がり、漸く品質の良いソフトビニール人形が出来るよ

うになりました。

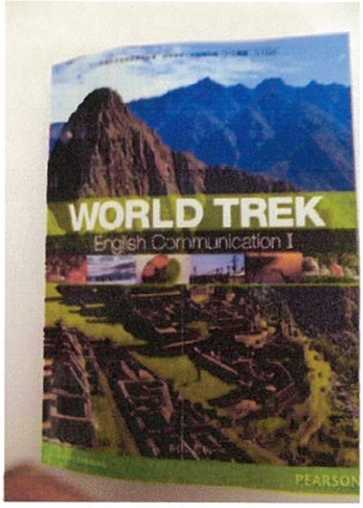
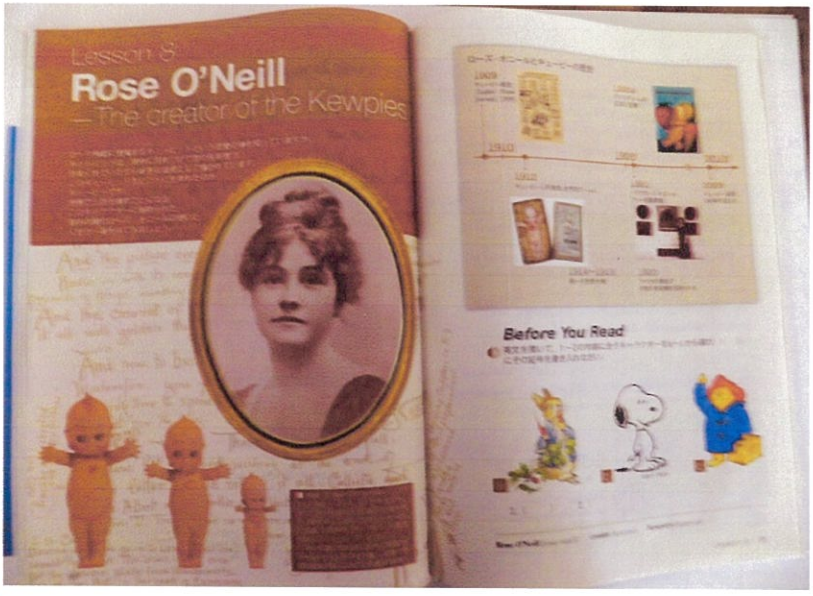
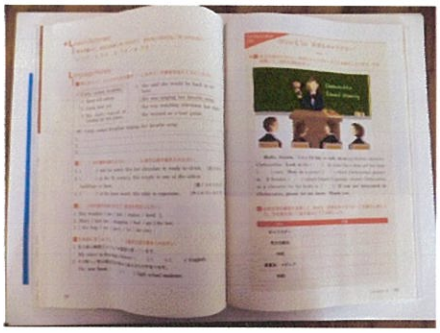
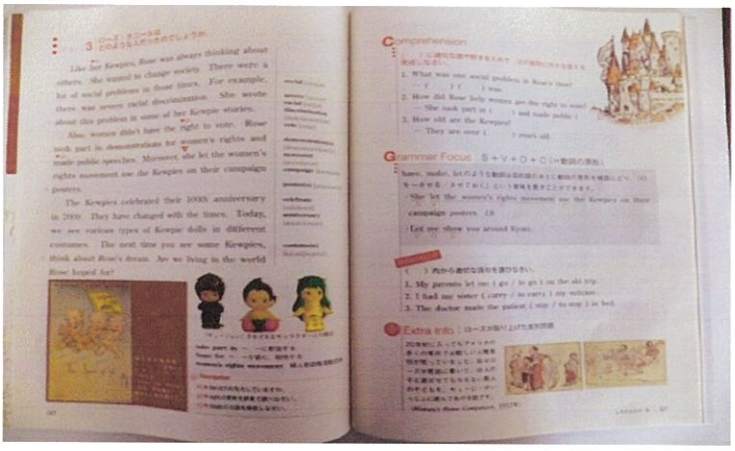
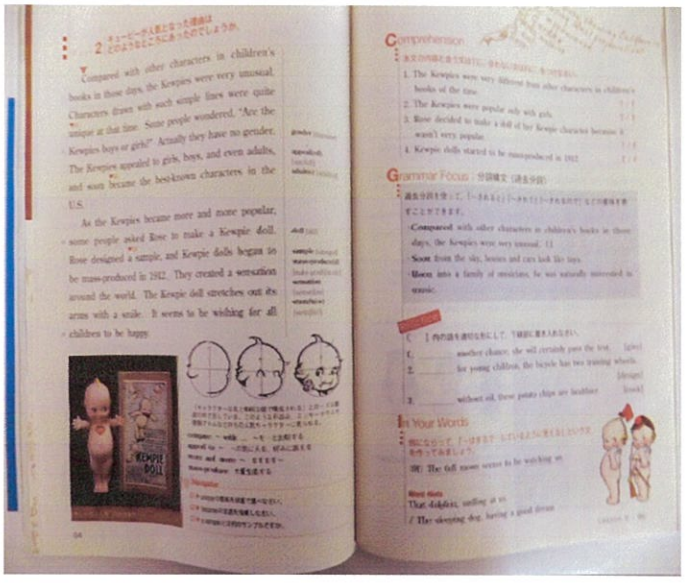
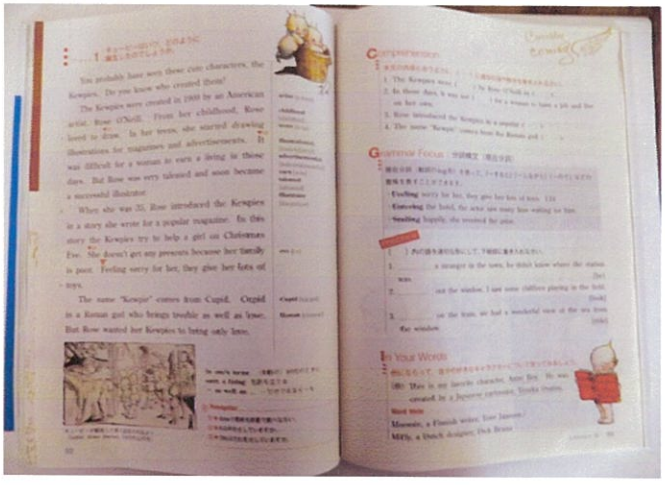
業界ではセルロイド玩具に代わる輸出玩具として、ソフトビニールが輸出玩具産業に大きく成長するものと期待をかけたのです。ところが 1968（昭和 43）年後半頃から、香港、台湾、韓国、中国等が安い工賃で生産を始めるようになり、これら諸国に浸食されて後退することになってしまいました。

＊＊＊＊＊

キューピーが登場して 100 年が過ぎました。人の嗜好は時代とともに変化しますが、キューピーは永遠に健在です。紙人形、コンポージネント、ビスク、セルロイド、ソフトビニールとキューピー人形の素材も変化してきましたが、それは高分子化学の歴史の一端でもある、と言えましょう。セルロイドハウス横浜館は、キューピーの元祖ローズ・オニールのことをこれからも伝え続けてまいります。

＊＊＊＊＊

平成 25 年の新学期が始まりました。4 月 5 日、街の書店で平成 25 年度高等学校の英語の教科書を買いました。ローズ・オニールとキューピーのことが、P90～99 まで 10 頁に

亘って載っています。これは、日本キューピークラブ会長・北川和夫さんのご努力の賜物だと認識致します。

（　以上でこの稿も終わります）